

2017-2018 年度 国際ロータリー・テーマ
会長 イアン H.S. ライズリー

2017-2018 年度 士別ロータリー・スローガン
伝えたい、心の息吹を隣人に



ロータリー
変化をもたらす



士別市環境センター（リサイクルセンター）

- RI HP <https://www.rotary.org/ja>
- 2500 地区 HP <http://www.abashiri-rc.jp/2017/>
- 士別 RC HP <http://www.douhoku.jp/sibeturc/>
- 例会場／士別グランドホテル
- 例会日／毎週月曜日 12:10～13:10

- 会長／北村 浩史
- 副会長／近井 孝義
- 幹事／谷村 一文
- 事務所／士別グランドホテル（東3条6丁目）
TEL 0165-23-1234

第 2714 回例会 2018 年 5 月 21 日（月）
今日のプログラム：・普通例会

● 前回（5月14日）の記録／・普通例会

司 会 千葉道夫 会場監督
 齊 唱 我等の生業
 本日の出席 会員 48 人中 出席者 40 名 出席率 83.33% 修正 87.5%
 本日の欠席 大江智宣、織戸俊二、加藤 博、川島 啓、近藤峯世、近井孝義、千葉繁夫、
 松塚信雄、
 ゲ ス ト 北海道警察旭川方面士別警察署 署長 東 昇 様
 メークアップ 北村浩史、近井孝義、谷村一文、織戸俊二、伊藤優市
 (5/12 日、旭川北ロータリークラブ創立 50 周年記念式典)
 北村浩史、近井孝義、但木行久、穴田俊昭、阿達 勇、水田孝志、菊地昭通、
 佐藤元保 (5/13 日、宝くじ桜植樹祭の協力)
 ニコニコ BOX 坂口芳一 (士別技能士会創立 50 周年式典終了)

累計 230,000 円

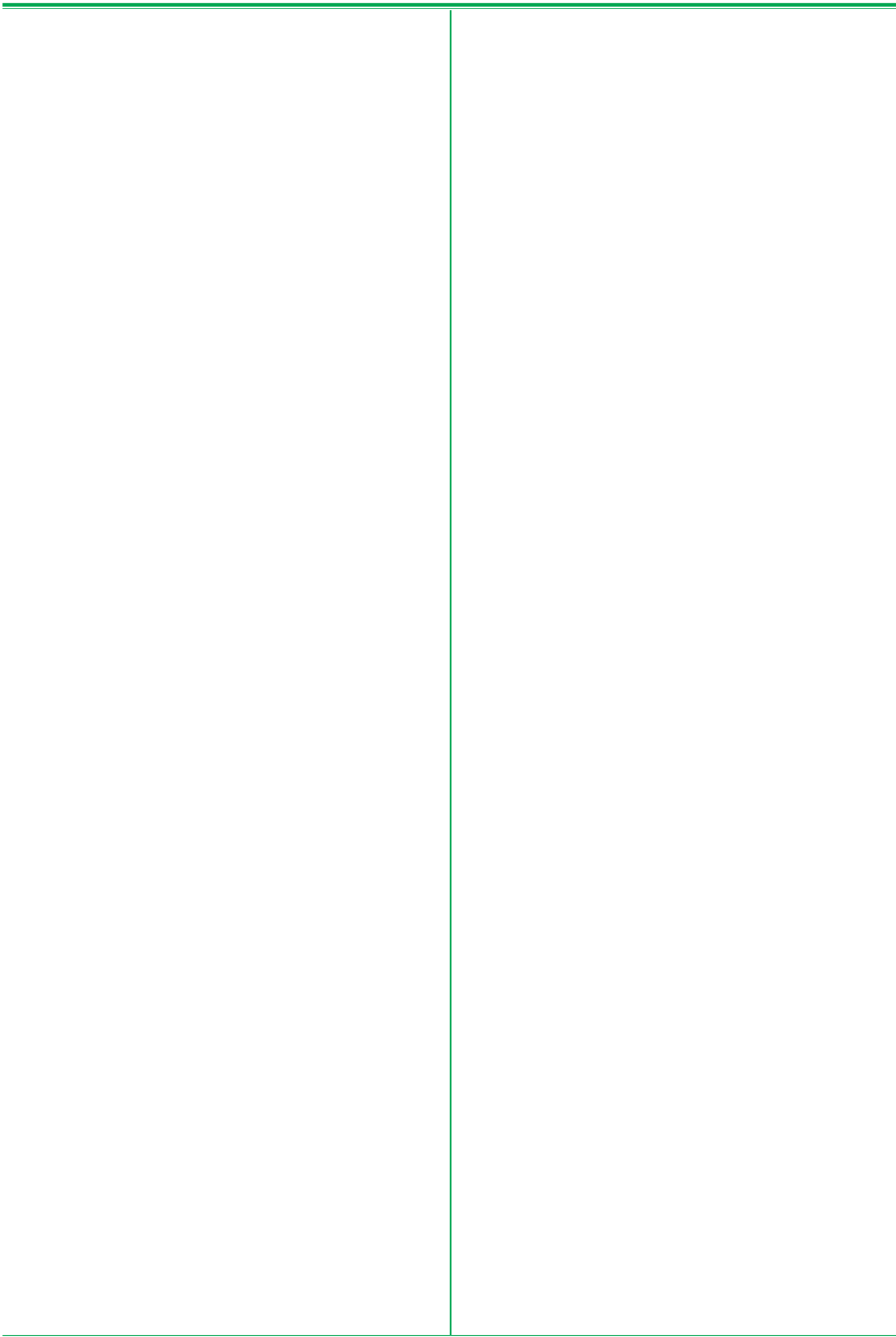
● 例会予定

◆ 5月例会

- 5月 7日(月) 普通例会・理事会
- 5月 14日(月) 普通例会
- 5月 21日(月) 普通例会
- 5月 28日(月) 夜間例会

◆ 6月例会（ロータリー親睦活動月間）

- 6月 4日(月) 普通例会・理事会
- 6月 11日(月) 普通例会
- 6月 18日(月) 普通例会
- 6月 25日(月) 夜間例会



自然と独善的な思考になるようです。警察での取扱い事案も、過去には半数以上を占めていたのは、少年犯罪でした。しかし、今や、少子高齢化で、高齢者による犯罪、例えば高齢者同士の近隣トラブルや、高齢妻や家族への暴力事件、所謂高齢者DVが急激に増えていると実感しています。高齢者による犯罪は、認知症等に代表される機能衰退もありますが、孤独ゆえの独善的な思考による規範意識の低下もその要因と思われる。事件ばかりではなく、車の運転にもその傾向は顕著に現れ、違反を繰り返す人や事故を起こす無謀な運転をする高齢者は、機能衰退のほか、独善的な思考に基づく過信者が多いのが現状です。社会に対する愛着や尊重があれば人は犯罪には走りません。突然の怒りや暴行は、人との接触が少なくなっていく独居家庭に多く見られるのです。そんな中、警察では制服警察官による巡回連絡、すなわち警察の行う家庭訪問活動を行っています。高齢者宅を訪問し、交流することで独善的な思考に陥りがちの高齢者へ、倫理観の再構築をさせる絶好の機会ととらえております。「警察官という他者・他人」と意見を交換し、交流すること、時に意見のぶつかり合いは、交流することで、独善的な考え方を改めさせ、倫理観の再構築になり得ると考えております。言葉を換えるとすれば、異なる意見により、自分の価値観のズレに気付くだけでも言いましょうか。高齢者は、自分なりの規範意識を持っております。そこを尊重しながら、訪問活動を続けることは、大切な警察活動の一つと考えております。今、お話ししたことは、士別ロータリークラブのスローガン「伝えたい、心の息吹を隣人に。」と重なるものであり、私たち警察活動も士別ロータリークラブのスローガンを実践していることになると思います。ちなみに、士別警察署にもスローガンもありまして、「燃やせ 士(サムライ)魂」という ただただ根性論・体育会系のスローガンでございます。若干見劣りがしますので、説明は割愛させていただきます。

■さて、本題でございますが、今日は、後輩警察官ではありません、岩手県警の若手警察官の体験談・手記を代読させていただきます。

彼は、M巡查という当時新米巡查であり、平成23年3月11日のあの東日本大震災を体験した男です。それでは彼の手記を読ませて頂きます。

東日本大震災当日、私は、山田町内のアパートで引越準備を進めていました。内陸の所属への異動を目前に、あとは最後の荷物を運ぶだけとなったところ、あの東日本大震災が発生したのです。今まで経験したことのない長く大きな揺れは、非常事態であることが瞬時に分かりました。直ちに制服に着替え、交番に向かう途中、街の防災無線で「大きな津波に注意せよ」とけたたましいサイレンと共に、繰り返されていました。交番に着くやいなや、上司から「M巡查、山田湾に向かえ、周辺住民の避難誘導に当たれ。防潮堤から海側へは絶対行くな。」と指示を受け、私は現場に向かいました。私は交番から飛び出すと、山側へ避難する人の流れとは逆に、防潮堤へ走り出しました。防潮堤の上に上り、山田湾を見下ろすと、潮位が次第に引いていくのが分かりました。「岸壁際の海底が見えるくらい潮位が引いています。」私はそう警察署に報告すると同時に「本当に津波が来るんだ。」という、これから待ち受ける言葉に出来ない恐怖を感じていました。私は、周囲にいた人たちに、「津波が来ます。逃げて下さい。」と叫びました。岸壁では、まだ漁師さん達が未だ作業を続けていたり海を眺めていたりしていました。私の声に気付いた人は、ハッと我に返るように、避難しはじめました。次に私が海を見た時には、今度は引いた潮位がゆっくりと上がりはじめるのが分かり、私は恐怖とともに焦りが生じてきました。まだ、数名の漁師さんが残っていました。声が届かず、「もっと近くに行かなければ声が届かない。」という気持ちが強くなり、「防潮堤を越えるな」という上司の注意に反して、海側へ降りて行き、大

声を出しながら身振り手振りで彼らに避難を呼びかけました。何人かが避難していく中、潮位が上がりはじめ、とり残されたのは、一人の漁師さんと私だけになっていました。潮位は、既に岸壁を上回ろうとしており、私は「もうダメだ。間に合わない上と思いつつも、漁師さんの手を引っぱり励ましながら、防潮堤の方へと必死で走り出しました。防潮堤まで、あと30メートルというところで、突然、鈍く大きい「ガツン」という舟同士がぶつかり合う音が立て続けに鳴ったかと思うと、波は遂に防潮堤前の岸壁を超えてきました。波に追われる形で、私たちは必死に防潮堤まで走り、なんとか防潮堤の上に駆け上がりました。息を切らし、防潮堤の上から海に目を移すと波が、さっきまで漁師さんが働いていた作業場は、波に飲み込まれ、海水が濁流のように押し寄せてきて、みるみる内に潮位が上がっていききました。防潮堤に一時避難した私たちは、このままでは、濁流にのみ込まれてしまうと思い、覚悟を決めて、他の漁師さん達とともに、今度は、高台を目指して再び走り始めました。最後尾を走る私たちの背中越しに「ゴーツ」という地鳴りのような音が一層大きくなり、振り返ると、波がさっきまで私たちのいた防潮堤を越えて陸側へのあふれ出すのが見えました。怖かった。次の瞬間、あふれ出した水は、大波となって私たちに押し寄せ、背中からとてつもない圧力がかかったかと思った次の瞬間、つないでいた漁師さんとの手もほどかれ、あらがういとまもなく、波に体を持って行かれました。私は、死を覚悟し、同時に気を失ってしまいました。どれ位の時間が経ったのか、近くから「M巡查、応答して下さい、M！」と声がしました。私を呼ぶ無線の声でした。私は、気がつくとも全身ずぶ濡れで、意識朦朧状態で、横たわったまま、手足を動かしてみました。「動く。」「生きている。」足に若干の痛みがあったものの大きな怪我はしていないようでした。正に奇跡でした。私の打ち上げられた場所は、急勾配の坂道の途中でした。私は運良く波にはさらわれず、坂の途中に打ち上げられたのです。しかし、私と手をつないで逃げた漁師さんの姿が消えていました。倒れていた私の傍らには、私の無線機があり、そこから私の身を案ずる同僚の悲痛な声が繰り返されていました。全身ずぶ濡れで、意識が朦朧とする中で、私はマイクを持ち、「大丈夫です。私はここにいます。」とだけ応えました。私が打ち上げられた場所には、まだたくさんの人がいて皆、パニック状態にありました。再び、防潮堤を越えてきた波が、私の足下まで迫ってきて、私は慌てて高台に走り出しました。高台に到達すると、私の見慣れたふるさは、濁流に覆われ、陸の上を漁船が走っては転覆を繰り返す異常な有様でした。それはこの世のものとは思えない、地獄絵図のようでした。しばし呆然とする私でしたが、自分のすべきことに気付き、第二波、第三波が押し寄せてもおかしくない状況の中で、私は住民の避難誘導を続けました。私は、さっきまで一緒に居た漁師さん達や、上司・同僚の安否など、たくさんの気がかりがありましたが、襲ってくる恐怖と絶望のはざまに、無我夢中で避難誘導と人命救助に当たりました。「津波にのまれた家に、まだ家族がいる。助けて下さい。」、ある家族が、切実な声で、私に訴えてきました。私はいつまた津波が来るか分からないものすごい恐怖と戦いながら、瓦礫をかき分けてその家の中に入りました。必死にかき分けた瓦礫の中から、泥だらけの男性を発見しました。確かに生きていました。しかし、ひどく衰弱しており、なんとか安全なところへ運んで、他の人に介抱をお願いしました。その後は、私の元に次から次へと救助の要請が入り、その度に現場へと必死に走って行きました。現場での人命救助に一段落を付けた私は、山側を通過して、山田町役場へと向かいました。私の勤務する山田交番は津波の直撃を受け、機能を果たせず、役場に拠点を置いていることを無線で知りました。私は、そこで私の身を案じてずっと無線で呼び続けてくれた同僚と再会し、涙を流して抱き合いました。山田交番員は全

員無事であることも確認できました。しかし、同時に隣の港町交番の勤務員の安否が確認できず、二人が行方不明であることもわかりました。私は、山田交番に勤務する前には、この港町交番に勤務しておりました。二人の内、一人は、私が警察学校を出て直ぐに指導してくれた交番所長、もう一人は右も左もわからない私を指導してくれた先輩でした。どちらも私には、とても優しくしてくれ、大好きな方でした。二人の安否はとても気がかりでしたが、次から次へと救助要請が入ってきました。津波にのまれ、怪我を負った人、住宅にとり残された人、足の不自由な高齢者など、救助要請は止むことなく入り、私たちは無我夢中で、正に次から次へと人命救助の任務に当たりました。体力は限界をはるかに超えていたと思いますが、異常に気が張っていたので、何とかやり続けることが出来ていたと思います。津波にのみ込まれた街は、日が沈むと停電で真っ暗になりました。道路だったはずの場所も、倒壊した家屋や瓦礫で埋め尽くされ、住宅地だったところには何も残されておらず、一面更地と化している所もありました。様変わりしてしまった街の中で、ろくな装備もなのまま私たちの救助活動は続きました。着ていた制服の背中は、怪我をした人を何度も背負ったので、真っ赤に血で染まっていました。翌朝になり、役場から見た山田町の景色は、まるで空襲でも受けたかのように火災で至るところから煙が上がっていました。午後になると、役場に一組の遺体が運び込まれました。遺体は女性で、たぶん彼女は、津波から逃れ、ビルの屋上に避難したものの、火事の火の手から、逃げることが出来ずに焼死したものと思われました。女性の変わり果てた姿と対面したとき、私は言葉を失いました。その女性は、真っ黒に焼けた両手で、自分の娘さんと思われる小さな子供の遺体をしっかりと抱きしめたままお亡くなりになっていたのです。我が子を最後の最後まで何とか守りたいとの一心だったと思います。私は、当時親子の受けたであろう恐怖や無念さを思い、その場に立ち尽くし、ただ泣くことしか出来ませんでした。その日以降、私は本当に多くのご遺体と対面しました。ランドセルを背負ったまま泥だらけで見つかった小学生、その子と対面した母親が泣きながら顔の泥をぬぐって優しく声をかけている姿が今でも忘れられません。手をつなぎながら見つかった老夫婦のご遺体。共に活動した自衛隊員の方と、二人のつないだ手が、ほどこけないように、そっと運んだこともありました。そして、残念なことに、私が津波にのまれたときに、一緒に手をつないで津波から逃げた漁師さんのご遺体も発見されました。その亡骸を見たとき、「私だけ助かって申し訳ない。」という息も出来ないほどの、苦しい気持ちと、あの時につないでいた漁師さんの手の感触がよみがえってきました。私は、毎日ご遺体と対面するたびに、本人やご遺族の無念さを思い出すとともに、助けてあげられなかった自分への無力感を感じていました。震災から、一ヶ月が経ったある日、「行方不明になっていた港町交番の先輩が遺体で見つかった。」という連絡が飛び込んできました。急いで警察署に駆けつけると、そこには、変わり果てた先輩の姿がありました。覚悟はしていたものの、あまりにも悲しく、とても耐えきれない事実でした。先輩は、警察署での検視を終えた後、家族の車に乗せられ、警察署を後にしました。署員全員が一行に並んで敬礼し、先輩を見送りました。私は、誰はばからず泣き崩れ、まっすぐに立つことも出来ず、最後はとても不格好でみっともない敬礼ではありましたが、先輩を見送ることが出来ました。私たち警察官は、3月11日以降、本当に多くの「人の死」と言うものを目の当たりにしてきました。私はそのたびに自分の無力さを感じると同時に、ご遺体に接する度に、「私だけ助かって申し訳ありません。」という気持ちが沸き、「どうか安らかに眠り下さい。」という言葉を出して手を合わせました。先ほど、私が津波に流された直後に、瓦礫の中から家族の要請により、男性の救助を行った話をし

ましたが、後日偶然にも、そのご家族と再会する機会がありました。私は、ご家族に「その後息子さんのご容体はいかがですか」と声をかけたところ、ご家族から思いの外、明るい表情が帰ってきたので、ホッとして「元気になられたんですね」と尋ねました。しかし、次に出た言葉は私の期待していた言葉とは全く違うものでした。「息子はその日の夜に息を引き取りました。」というものでした。私は自分の耳を疑いました。愕然とし、全身から力が抜けていくのがわかりました。「一体、自分の救助活動は何だったんだ。まさか亡くなるなんて」と、どうしようもないくらいの脱力感に包まれていきました。しかし、ご遺族の方は、こうも言いました。「あのとき、おまわりさんに助けてもらったお陰で息子と最後に言葉を交わすことが出来たんですよ。本当にありがとうございます。」と。私は、このご遺族の言葉で、本当に救われました。あの時の自分が取った行動が決して無駄ではなかったことをご遺族の言葉を介して教えられたからです。時が経つにつれ、発見されるご遺体も徐々に少なくなっていきました。同時に、わずかずつではありましたが、町に復興の光が射してきたようにも感じました。あれから、5年が経ちました。港町交番の所長は未だに見つかっていません。これが現実というものです。所長は、駐在所経験が長い方で、警察学校を出てきたばかりの私を「はじめて持つ部下だ」と本当にうれしそうに、またちょっと照れくさそうに話をしていたことを思い出します。わたしは、5年経った今、刑事をやっています。所長と生前に交わした「私は将来、刑事になります。」という約束を墓前に報告をすることも出来ました。私はこれからも「所長の最初で最後の部下」であり続けます。5年前の3月11日、私は、一度は死の淵に立ち、数え切れないほどの貴重な経験をさせて頂きました。我が身も流され、住んでいたアパートごと財産も失いました。それでも自分なりの信念を貫き、被災地で職務を全うできたのは警察官としての「誇りと使命感」だったと思います。「被災者である前に私は警察官である」という警察官としての誇りが私を支え続けてくれました。また、使命感に裏打ちされた行動は、例えば結果が報われなくとも、時に、誰かを救うことが出来ることも知りました。これからも、上手く行かないこと、悲しくつらいこと、思い通りにならないことはたくさんあると思います。私があの時津波に流され、一命を取りとめたとき、心配する同僚に無線で答えた「私はここにいます。」という言葉をお忘れません。いま、こうして私が警察官としてここに存在していることが、私の誇りであり誉れであります。以上、皆様のお昼時の貴重な時間を拝借し、私共の同僚の手記を朗読させて頂きました。平成も色々な事件事故、災害がございました。間もなくそんな時代も幕を閉じようとしております。皆様にとっての平成はどのような時代であったでしょうか。ロータリークラブ、そして警察もともに、職業倫理を高め、奉仕の精神を持って活動を行うことでは、意を共にする団体であります。どうかこれからも、それぞれの職域、そしてロータリークラブとしての活動におかれまして皆様のご活躍されますことを心からご祈念申し上げます。本日は誠にありがとうございます。

5月の結婚記念



谷村一文、大橋直幸、菊地仁、神田英一、佐藤元保、山口哲雄、各会員 おめでとうございます。